

# 青山学院女子短期大学同窓会東北支部卒業生 聞き取り調査のまとめ －1965（昭和40）年から1974（昭和49）年卒まで

西山 利佳

## 1. はじめに

本稿は東北支部の卒業生11名からの聞き取りのまとめとなる。2022年3月に秋田県と青森県、同年7月に宮城県、2023年7月に山形県、2024年6月に福島県でそれぞれ、プロジェクトメンバー2名1組で聞き取り調査を行った。以下は、聞き取り対象者を卒業年順にAからKのアルファベットをあてて一覧にしたものである。なお、HとKのおふたりは、文書による回答となっている。

### 聞き取り対象者一覧

| 記号 | 卒業年       | 学科 | 出身県 | 在住県 |
|----|-----------|----|-----|-----|
| A  | 1965（S40） | 英文 | 福島  | 福島  |
| B  | 1966（S41） | 英文 | 青森  | 青森  |
| C  | 1966（S41） | 英文 | 福島  | 福島  |
| D  | 1967（S42） | 家政 | 青森  | 青森  |
| E  | 1969（S44） | 教養 | 山形  | 山形  |
| F  | 1970（S45） | 国文 | 岩手  | 岩手  |
| G  | 1970（S45） | 家政 | 山形  | 山形  |
| H  | 1971（S46） | 教養 | 千葉  | 福島  |
| I  | 1972（S47） | 英文 | 福島  | 福島  |
| J  | 1974（S49） | 国文 | 秋田  | 秋田  |
| K  | 1974（S49） | 国文 | 山形  | 山形  |

以下、当日の話の流れでは話題が行き来しているが、質問項目に従ってまとめていく。

## 2. 出身高校と進路選択について

11名すべてが県立高校の出身である。Bの出身校青森県立青森高等学校は、前身は明治33年に青森県第三中学校として創立された旧青森県立青森高等学校と、明治40年に青森県立第三高等女学校として創立された県立青森女子高等学校の二校を統合し、昭和25年に発足した共学校である。Hは唯一県外出身者で、卒業した千葉県立佐倉高等学校は、ルーツが江戸期の「学問所」という歴史ある伝統校で昭和26年以降、男女共学校となっている。

今回の調査対象者11名中、残る9名の出身高校は、在籍時いずれも女子高等学校だった。具体的には、福島県立安積女子高等学校 (A)、福島県立磐城女子高等学校 (C・I)、青森県立八戸東高等学校 (D)、山形県立山形西高等学校 (E・G・K)、岩手県立盛岡第二高等学校 (F)、秋田県立秋田北高等学校 (J) で、沿革を調べるとすべて明治期に創設された高等女学校をルーツとしている。

いずれも進学校、あるいは、進学コースに在籍していて、進学自体は自然な進路としてとらえている様子であるが、この時代も短大進学背景には、親や家の価値観の影響が大きい。

1965 (S40) 年卒のA、1966 (S41) 年卒のB、1970 (S45) 年卒のGからは、親が四年制大学を許さなかったという背景が語られた。A、Cは、きょうだいの構成が同じで、本人と妹は短大に進み、弟ふたりは四年制大学へ進学したという。Gからは、父親から「婚期が遅れるから四年制は絶対だめだ」と言われたと語られた。また、1972 (S47) 年卒のIは、祖父をはじめ両親も「女の子は短大でいい」との考えであったので、I自身も自然に短大を希望した。当時の進学に根付いていたジェンダー意識がはっきりと見て取れるが、当人がそれに強い反発を覚えていたという風でもなく、異口同音に「そういう時代だった」と受け止めている様子だった。

DとJが、東京の大学に通う姉と同居する (Dは叔母の家) ことを東京に進学する条件に挙げていた。Eは、四年制なら山形大、短大なら東京でもよいと言われ、Fも、経済的にも東京なら短大と話されていた。Kは、第一志望の四年制大学が不合格だったことを第一の理由に挙げており、Jも青山学院大学も受験しており、合格していたら四年制に行っていたかもしれないと語っている。概して昭和40年代後半卒業の方々には、意に反した進路選択という印象はなかったが、東京でどのように暮らすか、教育費をどのように考えるか、各家庭で事情と価値観は違うとはいえ、「女子の進学」の無意識的な「あたりまえ」が潜在することは否定できないだろう。

さて、短大に進学するにしても、なぜ「青短」だったのか。以下のような言及があった。

英文科だったら青短 (青山) がいいと先生の勧めがあったのが、英文科に進んだAとC。Cは、寮があることも魅力だったと語られている。青短への進学者が多かったというのが、岩手のFと山形のK。Bは、「この街から飛び出したい」という思いが強く、「短大なら (東京に) やれる」という親からの言葉を受けて、すでに東京に住んでいる姉たちがいたこともあり「いろいろ情報はあったので、じゃ、派手なとこにいこう」と青短に決めたと言われた。パンフレットの中から「名前が知れている」青山を選んだというD、名前や立地だと語られたIからは、当時の青山学院や青短の社会的イメージを知ることができる。

本来国立理系の薬学部を志望していたが、前述のように父から「婚期が遅れる」と四大進学を反対されたGのエピソードは興味深い。四大を反対され、かといって地元には行きたくなかったので「どうせだったら2年間楽しもうかな」と考え、数学で受験できた青短の家政学科に決めたという。父親は東京に出ることに反対だったが、家政科だったら、

花嫁準備もできるからと説得したのだという。

Eは中学時代「おマセさんで『人間はなんで生きてるんだろう』とか、そんなことを先輩と夜遅くまで喋ったり」して親から叱られたりしていたという。自身のことを「生意気な子ども」だったと繰り返され、「変に理屈っぽかった」ので、ニーチェとか、キルケゴールとか「そういうのを喋ったら、かっこいいだろうな」と思い青短の教養科に進んだのだという。教養科は1966年開設で、1969年から教養学科と名称変更をしている。Eは教養科2期生である。新設間もない教養科（教養学科）がどのような学生の受け皿になっていたか、その一端を知ることができる。

Aは、幼稚園がカトリック系（聖マリア幼稚園、現ザベリオ）で、安積女子校の近くに修道院（無原罪修道会）があったので、下校時に立ち寄って、シスターに英語を習ったりしており、キリスト教には親しんでいたとのこと。Gもキリスト教の幼稚園に通っていて日曜学校には毎回参加していたという。Eも幼稚園がミッション系で、母親もクリスチャンだったということを後半の問いの中で語っている。話が進んでからDの叔母が3人洗礼を受けているといったエピソードがでてくるなど、これらキリスト教との関わりは、青短選択の理由としては語られていない。積極的な進路選択理由としてキリスト教が意識された様子は見られなかった。

### 3. 青短に入って感じた自身の変化

この質問はさまざまな語りを引き出し、軽々に解釈することはためられるが、応答の語りをおおむね以下のように解釈した。

Fの、すんなりとなじんだ、青短の雰囲気自分が合っていたという回答は、故に「変化」と問われても、答えようがないということだろう。

AとBは、その後の人生の大きな起点をこの問いに対する答えとして語っている。Aは特に挫折もなく「のほほんと生きていた」が、卒業後教員になるのだが、今後「神様に支えてもらわないといけないことが起こるのではないか」と考えて、卒業直前に受洗したという。寮生活を通して川尻知恵<sup>1)</sup>先生の姿に、こういう風になりたいという思いを抱き、朝礼拝夕礼拝もあり、他の学校へ行っている受洗を考えるようにはならなかっただろうと述懐した。Bは、この問いに対して放送研究会が本当に面白かった、卒業後東京で放送関係の仕事に就きたいと父に話したが却下され、泣く泣く青森に帰ったこと、しかし、青森放送のアナウンサーに受かったことと、その後のアナウンサー人生を語られた。

Dは青森にいるときには自然の美しさを感じなかったけれど、東京で電車通学の途中に夕日がすごくきれいで「都会の夕日ってこんなにきれいなのか」と自然の美しさに目覚めたことがユースホステル部の活動につながったと語られた。Eはきれいな標準語を喋ろうという意識が強く、東京の友だちにイントネーションの違いに気づいたら指摘するよう頼むほど「東北人とはれないように」と考えていたそうだが、東京に行ったからこそ山形の

良さがどんどんわかってきて「よし！じゃあもう山形弁で東京で過ごそうか」と思ったぐらい山形弁を大事にしていると語られた。両者、東北とまったく違う東京の環境に身を置いたことが地元の魅力を認識するきっかけとなったことを、自身の変化として語られたわけである。

残る6人が変化として言葉にされたことは、以下のとおりである。

Cは高校が進学校で勉強が厳しかったためサークルや生徒会活動はしたことがなかったが、学友会が低迷しているから今度会長に立候補する、という英文科のクラスメイトに頼まれて、2年の時に学友会の会計担当をしたという。Gはシオン寮に入れず下宿で一人暮らしをしたことが、「世界が変わった」第1の理由として語られた。短大内のロッカールームで財布の中身を盗まれ、事務所に届け出たら鍵をかけないあなたが悪いと言われショックだったという。そんなこともあり、自立心が付いたと述懐された。短大で出会った「初めて」を自身の変化の契機として語られている。

Hは高校ではそこそこの成績を取っていた自分はまだまだだと感じたという回答し、Iはこの問いに対して、ヒアリングが大変だったことを真っ先に語っている。おそらく、高校までの学業に対する自信が揺らいだことが印象深く残っているのだろう。Jは中学までは消極的で自分から声を発するようなことはなかったが、高校が女子校で少しずつ自分を出せるようになり、青短に入って、「みんな知っている関係」から解放されて自由になったという。Kは教科書でしか知らなかったキリスト教を知ることができたことで、「多少なりとも視界が広がった」ように思うと回答されている。どちらかと言えば無宗教だが、心情的には今もキリスト教に近いと思うと追記された。

これらは、高校までの自身を振り返り「変化」を言葉にされていたととれるが、この語りの胸中を推察するに、なにかスイッチがはいったような感じを思い出されたのかと思う。誠に勝手な解釈だが、「私が起動した」という印象を受ける。

## 4. 学生生活の思い出

短大時代特に記憶に残っていることを語っていただいた。当然ながら、印象に残る場面はそれぞれなので、まんべんなく語られているわけではないが、以下、「4.1 学業」「4.2 学業以外」「4.3 学外での生活」「4.4 キリスト教教育関連」「4.5 寮生活」「4.6 その他」の項目別に当時の青短・青短生の様子を知ることができる具体的なエピソードを列記していく。各回答の末尾に（回答者アルファベット・学科・卒業年昭和）を記入する。

### 4.1 学業

〈英文科〉

・たまたま俳句に興味があり、加藤楸邨<sup>2)</sup>先生は福島県に縁のある方で、原町（福島県）に一時住んでいたことがあるとかで、名前は高校時代から知っていたが、短大で教えて

いることは知らなかった。それなら国文科に入るのだったのにと残念に思った。英文科しか頭になかったので、国文科のことなど調べていなかった。廊下ですれ違ったとき、国文科の方に「あの方が有名な加藤楸邨先生よ」と言われて、「細長ーい」長身の方だった。平井照敏<sup>3)</sup>先生とかも、入ってから知った有名な方。加藤先生の授業は取っていない。川瀬一馬<sup>4)</sup>先生の『花伝書』の授業は取った。科に関係なく、短大の2年間にいろんな経験ができて良かった。(C 英文41)

- ・国文科の加藤楸邨先生の授業を選択したが、英文科からは自分だけ。俳句に特に興味があったわけでも、有名な先生だとすすめられたわけでもなく、きっかけははっきりしない。川瀬一馬先生の『花伝書』の授業も取った。英文学より英語の方に興味はあった。全て英語なので、先生の質問も分からず、ハラハラしながら受けていた。(I 英文47)

#### 〈国文科〉

- ・クラス担任が加藤楸邨先生。お名前は聞いたことがあったので「すごい先生に恵まれたなあ」と思ったが、俳句の授業ではなく国文の授業はあまり記憶に残っていない。多和はる<sup>5)</sup>先生の体育で社交ダンスを習ったことが、面白くこんなことを教えてくれるんだと思った。鷹見芝香<sup>6)</sup>(たかみしこう)先生というすばらしい先生の、かな文字を細い小筆で書く授業が初体験で、その時のテキストは手紙の書き方なども書いてあって卒業してからも使っている。そういう、手先や体を使った授業は記憶している。(F 国文45)
- ・国語が好きだったので国文科に行きたいと考え、調べていると加藤楸邨先生の名前があり、高名な先生の授業を受けられるのは良いなと思った。短大に合格し、受けられて良かったし、誇りに思える。卒論は西行について書き、指導は楸邨先生。国文科だけの旅行で信濃に一泊二日で行った。日帰りでも深大寺へも連れて行ってもらった。法学の授業を取っていたのだが、その試験の時、山をかけて行ったのだが、外れて問いに対する答えは通り一遍の薄っぺらいことしかかけなかった。しかし、必死に覚えていたことを「書きたい」と思い、解答用紙の裏にびっしりと書いて「裏に書いたから読んでください」と書いて提出した。そうしたら「優」をくれて、それがすごくうれしかった。(J 国文49)
- ・加藤健雄先生。授業では楸邨名はお使いにならなかった。授業中に「空(くう)」がどこにあるか考えてごらん?と問われたことを今でも覚えている。  
高階秀爾<sup>7)</sup>先生。現在、日本画・洋画・現代美術を問わず、東京はもちろん旅先でも必ず2、3か所は美術館を訪ねているのだが、これは先生の影響と思う。  
平井照敏先生に、木曽川の川の色を書いた作文をほめていただいたことは今も少し自慢で、市報や同窓会報などに依頼があれば書いたりもしていた。  
学生時代から読書好きだが、今も年に4～50冊は読んでいる。  
青木孝先生は少し怖かった。(K 国文49)

#### 〈家政科〉

- ・「みなさんハサミ注文しますよ。お名前入れて」と言われて作った、旧姓の入った裁ちばさみが私の宝。今でも使っている。

青山祭に家政科で喫茶店みたいなのを出店。その長だったのだが、忙しくなって私が手伝っていたら、「あなたねっ!! 長になっている人は、動いちゃいけないの。黙ってみているの」「そんなにね、ちょろちょろするもんじゃないのよ」と大西セチ<sup>8)</sup>先生に怒られた。割と厳しい先生だった。西洋料理をひとり一品自分で考えて作る課題で、最初の方がお皿にお皿を重ねて出して、皆それをまねしたら、「なんですかこれは。見たことありません」と怒られたり、プラスチックの食券(?)をきれいにガラスの器にならべていたら、「なんですか? 食器に、そんなね、いれられません」とおこられたりした。(バンバンとテーブルをたたく音と共にその時の様子を再現)。怒られた記憶はすごく残っているが、その文化祭終了後、お店で串焼きか何かを先生からご馳走になった。楽しかった。

阿部幸子<sup>9)</sup>先生がろうけつ染めを教えてくださいとさったとき、友だちの顔かどこかに蠟が跳ねたことがありますごく恐かった。(D家政42)

- ・ワンピースを作った。教育実習中それを着て「これ私がつくったんですよ」とお披露目したこともある。浴衣も縫った。今も取ってある。

野村万千代<sup>10)</sup>先生の郷土のお汁を調べてくる授業で、山形の芋こ汁を提案した。主だったものを作って試食して、その後先生はそれを本にされた。

本科の美術の授業でヌードモデルのデッサンがあった。本格的で驚いた。選択科目が多かった印象。卒論の記憶はない。ゼミは「仏の深江<sup>11)</sup>先生」。(G家政45)

#### 〈教養学科〉

- ・「これを読んで今度の試験の範囲にしますよ」と言われ、厚い本をたくさん買わされ、その範囲だけは一生懸命読んだ。(E教養44)
- ・西洋思想史の小原信<sup>12)</sup>先生の厳しい講義に突いていくのが大変だった。ほとんど理解できなかった。(H教養46)

## 4.2 学業以外

#### 〈クラブ・サークル活動〉

- ・オラトリオに所属。コーラスは好きだったが、高校時代は電車通学で本数も少なかったため、好きな時に帰宅できる美術部に所属していた。短大生も受け入れていた混声合唱団のオラトリオに所属。週3回の練習、年2回の演奏会、演奏旅行など。入部テストとして、最初に讃美歌を一人ずつ歌わされた。それで断られた人がいたのか、パート決めのためだったのかは不明。(A英文40)
- ・四大の放送研究部。クラス別になり勉強が始まったとたん、「女の子ばかり」なのに

仰天。それも「美しくて、賢くて、まじめでお勉強ができそうっていう女性の塊」だった。ずっと男女共学だったので、せっかく東京に出たのだから、男女問わずいろんな人と出会いいろいろな生き方を見て一緒に考えて学んでいきたいという夢を持っていたので、自分が求めているものとはちょっと違う、もう少し違った形で新しい世界を知りたいと思っていた。それで、クラブを決めかねていた時、親戚の子の友人が学院大の女性で、放送研究部が楽しいよと誘われ顔を出し、レッスンに一回参加したところ「ハマった」。NHKやTBSなどマスコミで働いているOB・OGが講習に来てくれたり、立教や慶応の「放研」と勉強会を開いたり、とても良い部に巡り合った。(B英文41)

- ・四大ユースホステル。当時女子学生が多くなかったので歓迎された。夜中に山手線をぐるり歩いて回るとか、あちこちのユースホステルを利用して移動したり。個人的に八戸に帰る途中、八幡平等のユースホステルでアルバイトをしたりした。(D家政42)
- ・四大ギターアンサンブル。沖縄や九州、広島、四国などに演奏旅行し、年に1回は定期演奏会を渋谷公会堂で行った。だから結構練習が大変だったが、楽しくて2年ではものたりなく専攻科に進んだ。(F国文45)
- ・四大ギターアンサンブル。ギターをやっていたのだが、短大にはギターの愛好会がなかったので、自分から入れてもらった。渋谷公会堂で合奏したことを覚えている。演奏会のための衣装として黒のロングスカートを友だちの家でミシンを借りて自分で縫った。家政学科だったので縫うことはできた。(G家政45)
- ・四大の自然研究会に入ったので、大学の構内でも楽しく過ごすことができた。(H教養46)
- ・グロリアス・クワイア。聖歌を歌い、夏休みやクリスマスにいろいろな施設（ハンセン病、ダウン症・盲人の方、児童養護施設等）を訪問し、多くの方と知り合え、今言われる「共生社会」をあの当時に教えていただいたような気がする。大学と一緒のサークルだったので男子学生もいてやはり楽しかった。当時のメンバーとは今も交流がある。(K国文49)

#### 〈その他〉

- ・アドグル：タッチャー<sup>13)</sup>先生のアドグル。一緒に八ヶ岳や清里の寮に旅行。ケネディが暗殺された時（1963年11月22日）、先生が泣きながら報告したことを覚えている。(A英文40)
- ・学友会：英文科のクラスで親しくなった人が、学友会の会長に立候補し、友だちから誰か入ってもらいたいから絶対やってといわれ2年の時会計を担当。その時の一番の思い出は、文化祭に芥川也寸志を呼ぼうということになりTBSに行って直接依頼し、受けてもらった。学友会の部長の叔父さんがTBS関係者で、そういうつてがあった。(C英文41)
- ・中軽井沢に学年全体で行った。おそらくオリエンテーション。「田舎育ちには軽井沢な

んて高嶺の花」だったから、話の種にと思った。そういう経験も自信になったと思う。

(I 英文47)

- ・短大の先生方と短大卒業生の職員の方々の「ハーモニー」が素晴らしいと感じていた。

(B 英文41)

### 4.3 学外での生活

〈アルバイト〉

- ・デパートでトークショーみたいなのがあり、淡路恵子さんのお部屋にお茶を運ぶアルバイトをしたことがある。オラトリオで映画のバックコーラスに讃美歌を歌ったことがある。なんの映画かは忘れた。(A 英文40)
- ・短大の学生課の張り紙で。駒沢公園のドライブイン。新宿三越ではユニフォームも着て受付。(E 教養44)
- ・短大の学生課の張り紙で。デパートのレコード売り場、歯医者にできあがった入れ歯を運ぶ仕事など、単発のアルバイトを休みの前などに。学校の紹介だと安心。(F 国文45)
- ・学校の紹介で行った。自分で探すことはできなかった。西武デパートで伝票の整理のようなこと。(J 国文74)
- ・学生でプールの監視員をしていた兄の紹介で、夏休みに赤坂のホテルのプールの管理人の手伝いをした。主にロッカーの説明等だったが、場所柄外国人や夜の飲食業の婦人方も多く、山形の農村地帯で育った者にはあまりに華やかだった。(K 国文49)

〈習い事〉

- ・間借りしていた大家さんの妹さんが華道（勅使河原和風会）の先生で、週一回通ってもらってお花をならい、免許も取った。(G 家政45)
- ・夏休み中英語から離れると忘れてしまいそうで、地元のネイティブの先生がいる英会話スクールに通った。(I 英文47)

### 4.4 キリスト教教育関連

- ・1 限と 2 限の間の短大礼拝は時間が空いたときに行く程度  
オラトリオの親友が通っていた教会に通うようになる。あちこちの教会に行ったが、後半は富士見ヶ丘教会に通いそこで受洗した。(A 英文40)
- ・多和先生と一緒に湘南の教会へ行ったことがある。(B 英文41)
- ・(寮生) 日曜日は必ず教会に行かなくてはならない。毎日朝と夕方礼拝。それに遅れないように帰ってこなくちゃならない。(C 英文41)
- ・キリスト教関係の授業はあったと思うが覚えていない。抵抗があるわけではないので、チャペルには誘われれば行ったという感じ。(G 家政45)

#### 4.5 寮生活・下宿生活

今回の調査対象中シオン寮に入寮していたのはAとCの2名のみだった。

BとGは入寮審査に落ちて、Bは明大前の親戚の家から通い、2年次は友人と目黒に住んでいた。Gは神泉の下宿で一人暮らしとなった。

ほかは、親戚や姉との同居が前提となっていたケースも多く、そもそも寮を検討対象にしていなかったようだ。ただ、先輩や友人の話を聞くと寮に行けばよかったなという声もあった(J)。

Dは姉とともに世田谷にある叔母の家から通い、Eは父が決めた等々力の下宿から、のちに上京してきた姉と駒沢のアパートでふたり暮らしとなる。Jも姉とふたり暮らし。Fは1年目は同じ高校の友だちと下宿し、2年目と専攻科生のときは学校で紹介してもらった代沢の下宿でひとり暮らしだった。Iは目黒区三田にあったいわき市の個人が経営する個人寮(6畳にふたり)に入った。Hは自宅から通学していたが、叔母が護国寺に住んでいたもので、遅くなる時にはそこに泊まったという。

上京生活を一人暮らしでスタートしたのは、Gのみとなる。「2」の問いに対するGの回答の切実さを思わずにはいられない。

〈寮生活〉

・素晴らしかった。今も東京で会うのは寮の友だち。一生の友だちができた。

6畳に3人で火鉢一つ。川尻先生がお当番(戸締り、電話番、火鉢を出しましたかと言って歩くなど)の人にご褒美として、東京の銘菓をいろいろくださった。それが楽しかった。(A英文40)

・お風呂焚き当番があり、薪で焚いたことに今考えてもびっくりする。門限は6時。(C英文41)

〈寮以外〉

・渋谷区神泉に下宿。混雑で電車に乗れず徒歩通学。大家さんの2階に部屋があり、台所は共有。下宿のおばさん(大家さん?)が山形の米沢出身で、Gが山形だというと、すでに決まっていた人をキャンセルして入れてくれた。広い庭で芋煮会をしたり、お花を習ったり(4.3に既述)した。(G家政45)

・兄の大学のサークル仲間の実家が女性専用の下宿を営んでいたもので、そこにお世話になった。亀戸だったので遠かったが、電車内で読書ができ苦ではなかった。(K国文49)

#### 4.6 その他のエピソード

以下、分類しにくい、当時の様子が垣間見られるエピソードを在学年が古い順に列記する。

・入学したのが東京オリンピックの開催年で、東京がどんどん変わっていく様子を見ていた。(B英文41)

・渋谷のフランセや青山のケーキショップなどでショートケーキを食べたりしたのも良い

思い出。(B 英文41)

- ・ 1年の時、東京オリンピック。沿道でアベベが走るのを見た。後に自殺した2位の人も見た。須賀川の自衛隊の人だった。(C 英文41)
- ・ 1年の時、寮とクラスが同じで特に親しくなった人が、夏休み明けに学校に来なくなった。どうしたのかと思ったら、夏休み中にアルバイト先の息子と結婚し、妊娠して退学してしまった (C 英文41)
- ・ ラッシュアワーの東横線で痴漢に遭いしばらく1限にでられなかった。プリーツスカートをナイフで切られたのに気づかず登校して、指摘されてすぐに帰ったクラスメイトもいた。

「最後の最後あたりで」学園紛争はあった。2年の時 (=1968年度) ロックアウトもあった。(E 教養44)

- ・ 気のあう4人のうち自分だけが地方出身で、東京出身者は皆おしゃれで、遊びに行ったら家にピアノがあったり、違いを感じた。映画を観に銀座に連れて行ってもらったり、東京のひとからいろいろ教えてもらった。(G 家政45)
- ・ 四年制と短大の間に塀があった。紛争はなかったけれど塀はまだあって、そこをくぐって行って良いのかなあという感じがかった。

短大の食堂の階段を降りていったところにあった掲示板に、他校のダンスパーティーのお誘いや、野球の応援のお誘いなどいろいろ張ってあったけれど、行けなかった。行きたかったけど。後から思えば行っておけば良かったと思うが、当時は別世界のような気がして気後れしていた。(J 国文49)

## 5. 在学時、青短は自身にとってどんな場所だったか

サークル活動の思い出をたくさん語った方が、とにかく「楽しかった」ということをまず口にされた印象である (オラトリオのA、ユースホステルのD、ギターアンサンブルのF、自然研究会のH、グロリアス・クワイアのK)。Kはサークルの仲間に誘われて大学の講義も何度か受けたことがあるとのこと。Kに限らず、サークル活動を通じた交友関係が、サークル以外の部分でも世界を広げていたことと思う。

放送研究会のBは、世界が広がった、世の中にこういう人もいるのだ、こういう世界もあるのだと教えてくれた場、スタート地点、いろいろな選択をして良いのだということに気づかされた場と語っており、これは、卒業後の人生をうかがうと実に腑に落ちる。Gは「夢の世界」と表現し、「ひとりで自由で」と続けた。「別世界」と答えたJは、実家が商家で「あれはどこの誰」と言われるのが嫌でしばらく地元を離れたかったと語っており、短大に入ってどんな変化があったかという問いに、自分の事を知っている人がいない世界で自由になったと語っていた。

この質問から歌舞伎を観に行った話や、オリンピックでアベベを見たことを思い出して

語ったC、キャンパスが素敵、「おしゃれ」と語ったE、そして、「自分を磨いてくれるところ」と総括した上で、具体的にショッピングや町歩き思い出を次々と語られたIからは、東京の、青山学院のキャンパスという空間に身を置いて、さまざまな刺激を全身で受け止めていた高揚感のようなものを感じる。楽しさ、自由、新鮮な体験、これらが交ぜとなった時間と空間だっただろうと想像する。

Eが、キャンパスがとにかく素敵と語り、続けて、自身がキリスト教系の幼稚園、母もクリスチャンだったため青学で礼拝や讃美歌などを歌ったイメージが強く、卒業式に「仰げば尊し」を歌わなかったことが「すごく、私の（青短の2年間の）イメージ」と語っている。恣意的な深読みになるかもしれないが、明治期に作られた唱歌「仰げば尊し」の打ち出す師弟関係や立身出世主義が象徴する、近代日本のある意味固い学校イメージと、青短が体現していた教育の対称性が直感されていたのかもしれない。そう考えると、この回答は非常に象徴的で興味深い。

## 6. 卒業後の進路、ボランティア活動など

### 6.1 卒業後の進路

卒業後すぐに帰郷し、家の手伝いをしたのはJとKの2名だった。

Jは短大卒業生は当時ほぼ就職していたので、就職する人が羨ましかったと語っている。Jは実家が秋田の商家であったため、そのこともあり地元を離れたかったという思いも語っていた方である。卒業後、秋田に帰りたくはなかった。しかし、東京で同居していた姉が埼玉県内で教職に就くことになったため、少なくとも娘のひとりには家業を手伝うものと考えていた親から帰ってくるように言われ、実家の手伝いに入ったという。また、Kは在学中に、祖母が寝たきりの状態になっていた上、母親が雑貨店を経営していたため、卒業すると帰郷し介護と店の手伝いをしていたとのこと。祖母は半年ほどで他界したが、家事手伝いのまま結婚し、夫の両親と同居しながら専業主婦を27年間務めたとのことである。ただ、専業主婦ではあったが、自分で時間の調整ができる県と市の統計調査員を15年間務めている。国勢調査だけでなく、事業所、労働力、家計経済活動等結構な回数があり、その調査期間は準公務員となるとのことである。

就職した9名中、東京で就職したのはC、E、Hの3名である。

Cは自宅生でないと東京での就職先はあまりなかったが、東銀座にあった東銀座東急国際ホテル（「たぶんオリンピックを当てにして建てたホテルだと思う」とのこと）が寮もあるから地方出身の方も良いですよというところで、そこに就職した。英語を活かせると思ったが、関係無い会計に配属された。親も「四大にやったつもりなら、寮もあるし」ということで反対はなかったという。そのうち、親が「女は24までに結婚しなきゃだめなんだ」とか「（実家の）お店（時計店）の手伝いでもしてくれ」と言ってきたため、自分でも「もう東京もいいか」と思い帰郷。その後24歳の時に見合い結婚。結婚相手は仕事の関

係で東京に転勤もあると聞いていたのでそのつもりだったのだが、夫の兄弟がやっている会社の専務（夫の兄）が急逝し、手伝って欲しいと言われてその会社があるいわき市で数年暮らすことになる。そのうち、郡山に支店を出すことになり、以来40年以上郡山暮らしで、3人の子育てをしながら専業主婦できたという。

Eは自身のことを繰り返し「生意気」と語られていたが、この問いの中でも、「すごく生意気だったんで、どうしても私は東京に残りたい。彼氏もいるし」と語り始められた。しかし、東京に残ることには親から難色が示された。いろいろ考えたり、さまざまなものを追求したりするのが好きだから新聞社に入りたいと思ったのだが、そうすると山形に戻ってコネが効く山形新聞社に入らねばならない。しかし、どうしても東京にいたい。父親が銀行なら許すというので、父の知人に保証人になってもらい三井信託銀行の日本橋本店に入ることができた。そこの信託課で2年、当座預金に2年いたところで、母が病気になり、看病のために帰郷したという。Eはその後、会計事務所で働いているときに、音響関係の世界に出会い、元々音楽が好きだったので、講習も受けて、ステージの音響設営などを始める。その後、夫がシンガーソングライターだった関係で、山形のライブハウスで歌うようになり、そこで東京から来ていた音楽プロダクションの人に出会い、上京してジャズスクールに通い、ホテルやライブハウスで歌うようになる。そのうち、自然な英会話ができないのに英語の歌を歌っても気持ちが通じるわけがないと考え、兄が渡っていたハワイへ行き、兄の嫁がアメリカ人だったこともあり、英語漬けの2年を過ごす。帰国後、プロダクションの仕事が過酷だったこともあり、独立をして都内のクラブ、ジャズライブ、ホテル等で歌ってきた。その間何度か結婚をしたなど、波瀾万丈の人生をオープンに語られた。複数の同席者もいる中での聞き取りであったが、賑やかな笑い声と発言が交錯し、そのこと自体が人となり、卒業生同士の関係性のすがすがしさを感じさせるものだったことが録音記録からも伝わってくる。

Hは日本橋で3年間会社勤めをしたのち、高校の同級生と結婚して千葉へ戻り、44歳の時、千葉の自宅を売却して福島県猪苗代町へ移住し宿泊業を始め、以来福島県在住とのことである。

さて、残る6人は、卒業後帰郷して就職し、3年ほど働いた後、退職している。

Aは、入学当初から卒業後は郡山に戻ることが前提で、特になりたい職業があったわけではないが、教員採用試験を受けたら「受かってしまった」。「たぶん、青山っていうだけで受かったような」気がするとは、謙遜もあるにせよ、試験官の「あ、青山ですか？」という反応を語られたので、青山に対する高評価があったことは確かなのだろう。公立の三春中学校に赴任し、充実した教師生活を続けていたが、共働きの同僚の子どもが預け先でひどいやけどをしてしまったという出来事があって、私は共働きができる人間ではないと思って、3年務めた後、辞めることにした。その後見合いで結婚。嫁ぎ先の自宅で近所の子どもに英語を教えることを下の子が高校を出る頃まで続けていたという。その後、フルタイムの中学の英語講師に復帰し、それは楽しかったのだが、夫が市会議員の選挙に出る

こととなり3年で辞めることになった。以降、再選を重ねる市会議員の妻として気の張る生活が続いた様子である。

Bは放送研究会（部？）の活動を通して、放送が性に合っているし、大好きになっているから東京で放送局に勤めたいと「（親に）お願いしたら、もう即却下」。「放送局は青森にもある」と言われ、青森放送を受けて合格。就職しアナウンサー科に入る。就職の3ヶ月後にはお見合いをしたが、仕事がおもしろく今は辞めたくないと告げ、2年後に結婚し、25歳の出産直前まで局での仕事は続けた。ラジオからテレビの時代に移る時期で面白かった。結婚していた当初、会社を経営していた夫の給料より高かったが、退職金ももらい、すばっと辞めたつもりが、3年おいて、ふたり目の子どもを産んだ辺りで、文部省が「今までの幼児教育を見直す」として、地方局一局に幼児教育番組を作るよう指令が出た。そこで、3歳児、0歳児を子育て中のBが適任だろうということになり、5年間出演した。当時「フリー〇〇」という言葉も無かった時代で名刺も持っていなかったが、退職したときから仕事が途切れることはなかったとのことで、具体的にさまざまな出合いや番組の様子が語られた。

Dは、都会は人が多くて住むには合わないと思い、自分の意志で卒業と同時に八戸に帰った。2ヶ月ぐらいしたときに友人が勤めている銀行で募集しているから受けてみてと声がかかり、採用試験を受けたら合格。4、5年勤め、結婚退職。子どもが幼稚園に行くようになったころ、親も近くにいたのでパートで事務仕事を再開し、それは60歳になる頃まで続けたという。

Fはギターアンサンブルが楽しくて進んだ専攻科を終えると、「約束」だから盛岡に戻る。高校時代放送委員会にはいっていて、少しマスコミ関係に興味があったので、そのころできたばかりのUHF局のテレビ岩手に親の知り合いがいた関係で受験できて、採用され3年ほど勤めた。国文科だったので、新聞社に配るための番組の宣伝原稿を書く仕事を担った。入局してまもなく、浅間山荘事件や、雫石のジャンボ機墜落事故があったりで、騒然としていて、自分が現場に駆けつけるわけではないけれど、「なんか自分たちも、その気になっていろいろやってた。そういう時代だった」という。当時は、女性が結婚後も会社を続けるという常識がなく、続けている人は大体独身で、ほとんどの人は結婚退職していた。男女の給料は同じで、辞めずに働いていると「ちょっとお給料泥棒」みたいな感じで居心地が悪かったという。そのためFも社内結婚し退職した。子どもが中学生と大学生になってから、画廊兼雑貨店で10年近く働いた。

Gは、父親からここを受けろと送られてきた書類で山形銀行を受け、結婚を機に退職するまで3年半勤めた。結婚は仲人を通したが、相手は中学時代の友人の兄だった。退職後、銀行の支店長に頼まれ、近くの支店でパートとして勤務したが、姑から家業を手伝うように言われ、4か月ほどでパート勤めも辞め、以来現在に至るまで家業の経理を務めている。

Iは祖母が小学校の教員をしていたこともあり、母からは教員免許を取ってはと言われ、母校で教育実習をしたが、自分には向かないと思った。当時はほとんどの企業が自宅

通勤を条件にしていたので行きたいところはだめだった。そこで、都内にあった栗田工業に縁故就職し一人暮らしを始めた。入社すると英語で書類を作成する業務があり、会社からの要望でタイピスト学校に通った。退社後にタイピスト資格を取得するための勉強をするのは大変だったが、職場では「紅一点」だったので大事にしてくれた。帰省中に見合いの話があり、1973年に大学病院に勤務する医師と結婚し、郡山の病院勤務を経て1983年に夫の地元で開業した。一男二女を育てながらの産婦人科医院の経営は盆も正月もないコンビニエンスストアのような生活だった。

## 6.2 同窓会活動、ボランティアや生涯教育やについて

本調査は短大同窓会の各支部の協力の下、聞き取り対象者を推薦していただき、支部総会出席者を中心に行っている。そのため、当然ながら、同窓会活動には積極的に参加している方が中心になる。A、G、Jは各県部会の発足時からずっと関わっているという。周りに青山出身者が多く、校友会のお誘いなども来ていたので、入社後少ししてから入ったという岩手のF。Gは山形県部会発足のとき（H9年）、会場となった天童ホテルの女将が青短の教養学科の卒業生で、高校の同級でもあったので、その彼女にも会えるかと思って出席したと語っていた。これらのエピソードから、地域に青学・青短の人脈がはっきりと存在していることがわかる。

Fは2011年の東日本大震災の時、青短がボランティアで岩手を支えてくれたことに繰り返し感謝を述べた。震災後、岩手と青短のつながりが生まれてありがたかったという。震災当時の東北支部長として、青短の被災地支援ボランティア活動Blue Bird<sup>14)</sup>の食事を用意したり、青短からの支援物資を宮古市に送ったり、被災状況を往復ハガキで確認し、地元の同窓会の方々と協力して義援金を現金書留で送ったりしたという。また、関西支部が100万円ぐらい寄附を集めて早い時期に送って下さったとのことだった。関西の支部総会に参加した折、阪神淡路大震災時の同窓会の支援の動きを聞いていたので、同じく甚大な被害を受けていたが故の素早く手厚い動きであったことがよくわかった。同窓会のネットワークと助け合いの精神が、非常事態の中で底力を発揮したといえる。

フリーアナウンサーだったBや歌手として活動していたEはそのスキルを同窓会活動にも活かしていた。Bは番組上で知り合った方のつながりでNPO白神山地を守る会に参加し、町から提供された廃校になった小学校校舎を使って子どもたちのキャンプなどを企画運営しているという。Eは、老人ホームなどに呼ばれてリクエストにこたえて歌を歌うことも多いとのこと。Kは、2024年3月まで、市の福祉協力員で年に数回高齢者住宅を訪問等をしていたとのこと。目の見えない方を案内するとか、高齢者や障がいのある方のバスの乗降に手を貸すとか目の前で困っている方がいればためらわずお手伝いはすると回答している。Kはまた、ふたりの息子が進学等で家を離れたのち、20年前から政治家の次兄の山形事務所を手伝っている。3年前夫の母が100歳で、昨年夫が75歳で亡くなったが、介護をしながら仕事も行っていたという。同じく書面回答だったHも「自分のできる範囲で

ささやかなボランティアを行っている」と書いていた。PTA活動(A・B)や教会のコーラスや婦人部長としての働き(A)などは、話の流れの中で拾えなかっただけで、他の方々も同様の活動をされてきたのではないかと考えられる。

Cが関わっている「高齢者大学」<sup>15)</sup>は、地方自治体の取り組みとしても興味深い。市の主催でまず4年、そのあと「大学院」が2年間あり、週に一度2時間ぐらいの講座が開かれるという。高齢者対象の市主催カルチャーセンターというイメージだろうか。その課程を終えると、自分たちで内容を企画し、講師を頼んだり、会場を押さえたり、旅行なども企画するらしい。その無償の世話人のようなことを10年ぐらいやっているという。受講生として自分の学びに始まって、学びながら運営もするという働きは、知的バイタリティーとボランティア精神なしにはとてもできないと思わされた。

Cはまた、娘2人が相次いで結婚することになって、自分も何かやらねばと思い立ち、市で開かれた俳句入門講座に参加し、以来二十数年続けているという。加藤楸邨先生の名前は知っていたが短大で教えているとは知らず国文科に入れば良かったと語っていた英文科卒のCであるが、俳句はこのときが全くの初めてで加藤楸邨先生に当時習っていたら違っていたのだろうかと述懐している。

Aは教会だけでなく地区のお母さんコーラスにも参加しており、郡山にあるバッハ研究会は30年ぐらい続けているということで、三つの団体で歌い続けているという。

Dは、父親の具合がよくなって介護のつもりで続けていた事務仕事を辞めたのだが、ぼーっとしているのが嫌で、「裂き織り」やピアノを始めた。油絵も師事したい先生の所に行って描き始めたという。そうすると、のめり込んで介護どころじゃなくなったと楽しげに語られた。「さをり織り」も究め、頼まれれば教えているという。自分の趣味のことばかりで、ボランティアなんて関係無いと話されたが、展示会を開いたり、教えたりということ、楽しみを社会と分かち合うボランティア精神の表れと言えるだろう。

## 7. (今振り返って) 自身の人生にとって青短とはどのような存在か

卒業の直前に洗礼を受け、現在も熱心に教会に通っているAは、ちょっと考え込まれたが、一言で言うとしたら?と問うと「神さまが作ってくれた青山学院だと思っているから、そこに招いてくれてありがたいと思っている」と述べられた。

放送研究会に入りそこからアナウンサーを中心とした仕事を重ねてきてQ4で「スタート地点」とまとめていたBには、Q4とQ6をまとめて問うような流れになっていたため、「はっきり、なんか、見えた場所」だったという言葉は、むしろ、在学時のBにとっての青短の定義になるかもしれない。その後続けて同窓会の支部総会で、知らない人なのに、懐かしいと感じる先輩や後輩に会うことがあるという話から、「華甲の祝い」という還暦のお祝いに、何か面白いことをしようと放送研究部の人たちと4泊ぐらいする集まりをプロデュースしたという話に展開していた。

「(今振り返って) ご自分の人生にとって「青短」とは?」というQ6の問いかけから、今も続く友人関係を語り出す方は多い。「居心地のいい楽しいところだった」と語っていたFが、この問いに答える中で、東日本大震災のときの青短のボランティアによって身近になり、当時も良かったイメージがますます良くなったと語ったことも、つながる人間関係が想起されたことで、類似の振り返りと取って良いだろう。Hは「生涯の友人・尊敬できる先輩たち」と回答し、青短に進学したことが自分の人生で重要な位置を占めていると書き、2人の娘さんが青学の英文科、青短の英文科にそれぞれ進学して「大変有意義な学生生活を送ったと思っている」と結んでいる。Kも「わずか2年間でしたが、70年近い人生の中で生涯の友ができ、共生という言葉を考えて得がたい時間だったと思う」と回答している。

この「有意義な学生生活」「得がたい時間」という在学時を「輝き」で捉えた回答も複数あった。

Cは「輝いた2年間」と表現し、親にお金を出してもらって、そんな裕福に過ごしたわけではないけれど、銀座に行ったり歌舞伎を見たり、寮では季節毎のさまざまな行事があったり、いろいろな経験ができたと振り返った。Gは「大切な大切な光っている思い出」とまとめ、「行って良かったなあ」と思いますと語った。

Jも「人生の中で一番輝ける時代」と「輝く」という言葉を選んでいる。若さと自由と、都会で初めて目にするもの、と続けている。

Eは考えた末「青短出身です」と言うともみな「すごいね」と行ってくれと語り始めた。その中で、「(山形) 西高→青短」は「最高のお見合いコース」と言われたときもあったというエピソードが出て来た。

Dは「礎。自分の成り立ちの中に重しとしてのこっているもの」と表現された。

それに通じる実感だろうと思われるのが、Iの「バックボーン」「後ろ盾」という言葉だった。わずか2年間にもかかわらず、青短で過ごした時間が自信になっていて、結婚し、子どもを育てこうやって生きてきた中で、「安定剤」というか、「私は、あそこでやったんだから」と「鼓舞するような感じ」と語った。そして、そこで出会った友だちがずっと支えになってくれていると語っている。Iは東日本大震災の時、両親を津波で亡くし、実家は流出している。原発事故後、茨城県に住む青短の友人が避難の受け入れを申し出てくれ、自分の家族だけでなく、弟、妹の家族も一緒に、友人宅の離れに3週間ほど滞在しお世話になった。洋服や食料品の支援物資を送ってくれた東京の青短の友人もいた。また青短同窓会東北支部からお見舞金を頂いた。大変過酷な体験を冷静に詳細に語ったが、Iが言う、青短の友人の支えという言葉の重さに胸を打たれる。また、Iはおもしろいエピソードも披露してくれた。新宿高島屋のベンチで一休みしていたときに、たまたま隣に座った女性と話を始めたところ、その方が昭和30年に青短の英文科を卒業した4期生とわかり、連絡先を交換した。その方がとてもしっかりはきはきとされている姿に、Iは刺激を受けこの偶然の出会いをおもしろがっていた。デパートで一休みしているときに、隣の人と世

間話を始め、会話が弾むということ自体、他者に対する開いた心の有り様そのもので、聞き取りをしたわけではない、その4期生に当たる女性もふくめ、青短同窓生のしなやかさのひとつの現れと受け止めた。短大同窓生であるというだけで、すぐに打ち解けられるというようなことを今まで何度も耳にしたが、青短同窓生のまとう空気が、自然な雑談を誘ったのかもしれない。

## 8. おわりに

今回の聞き取り対象者11人の内3人は、在学中に東京オリンピックを経験しており、開発が進み大きく様変わりする東京を肌で感じている。実家が現いわき市で時計店を営んでいたというCは近くに常磐炭鉱があり、景気がよかったところで高級時計がよく売れていたと話していた。卒業生の語りの中に洋菓子店「フランセ」や「ダンスパーティー」といった単語も頻出し、世の中の空気が第1期の聞き取りで聞いてきたものと、ずいぶん変わったことを実感した。

聞き取り対象者の青短進学の動機や背景は、女子には四大より短大という考え方が親(家)に根強いことは第1期からあまりかわっていないようだが、卒業後の進路に関しては大きな変化が見て取れた<sup>16)</sup>。自宅生以外が東京で就職するのが難しいという全体の状況は相変わらずのようだが、第1期のまとめでは実家に帰ったのち、多くが「花嫁修業」をしているのに対し、今回の聞き取り対象者からは「花嫁修業」の言葉は出てきていない。就職しても3年ぐらいで結婚、ないしは、妊娠出産を機に退職する「空気」も相変わらずとはいえ、徐々にではあっても、「花嫁修業→嫁入り→子育て」という型が揺らいできたことは確かだ。今後の調査で、社会状況、社会一般の感覚、そして、同窓生が抱く女性のライフイメージの変化がどんな言葉で証言されるか、楽しみである。

東日本大震災の体験を聞くことができたことも、貴重な収穫だった。青短Blue Birdとの関わり(F)、そして、Iの過酷な被災体験が、同窓生のつながりが具体的で実効的な力を発揮する大きな証言となっている。

基本的に個別に行ってきた聞き取りであるが、何人かは、同席者がいて場合によっては、自由な会話が行き交っていた。特に、Bの聞き取りの際は、ずっと年下の同窓生も同席していて、最後に、育児をしながら、自分の勉強や仕事にどのようにあたっていच्छったのかという質問をしたことから、子育て世代と人生の先輩との対話がひとしきり展開していた。この調査報告は、同窓生が世代を超えて敬愛の関係を構築し、青短に学んだ時間をより意識していく契機にもなるのだろうと学ばされた次第である。

### 追記

Bさんは、2024年1月にご逝去されたため、本稿をご確認いただく事ができなかった。ご冥福をお祈りしますと共に、豊かな人生を語って下さったことに心から感謝します。

## 参考図書

- ①『青山学院女子短期大学の歩み』青山学院女子短期大学、1975年11月16日
- ②『青山学院女子短期大学開学50周年記念誌 50年の歩み』青山学院女子短期大学、2000年11月16日
- ③『青山学院女子短期大学 六十五年史－資料編』青山学院女子短期大学六十五年史編纂委員会、2018年3月20日

## 注

- 1) 川尻知恵 シオン寮寮監。在職期間：1950年4月～1964年3月。典拠①p.285
- 2) 加藤楸邨 (1905-1993) 俳人。本名加藤健雄。青山学院女子短期大学名誉教授 (1985年贈呈) 青短国文学科専任期間：1954年4月～1974年3月。典拠③p.882、p.883
- 3) 平井照敏 (ひらいしょうびん) (1931-2003) 俳人・フランス文学者。青山学院女子短期大学名誉教授 (1999年贈呈)。青短専任期間：教養学科1966年4月～、一般教育科目1972年4月、芸術学科1989年4月～1999年3月。典拠③p.879、p.883
- 4) 川瀬一馬 文学博士。青山学院女子短期大学名誉教授 (1985年贈呈)。青短国文学科専任期間：1950年4月～1974年3月。典拠③p.882、p.883
- 5) 多和はる 青山学院女子短期大学名誉教授 (1986年贈呈)。青短一般教養科目専任期間：1951年4月～1986年3月。典拠③p.882、p.883
- 6) 鷹見芝香 (たかみしこう) 本名鷹見乙女。青短兼任講師期間：1954年度～1975年年度。典拠②p.363
- 7) 高階秀爾 (1932-2024) 美術史家。美術評論家。着任形態・期間等是不明。
- 8) 大西セチ 青山学院女子短期大学名誉教授 (1985年贈呈)。青短家政学科専任期間：1950年4月～1977年3月。典拠③p.880、p.883
- 9) 阿部幸子 青山学院女子短期大学名誉教授 (2004年贈呈)。青短家政学科専任期間：1961年4月～2004年3月。典拠③p.880、p.883
- 10) 野村万千代 青山学院女子短期大学名誉教授 (1985年贈呈)。青短家政学科専任期間：1950年4月～1975年3月。典拠③p.880、p.883
- 11) 深江先生 詳細不明。
- 12) 小原信。青短専任期間：一般教育科目1967年4月～、教養学科1968年4月～1979年3月。典拠③p.882
- 13) タッチャー Thatcher Juliana 青短英文学科専任期間：1962年10月～1965年6月。典拠③p.881
- 14) 青山学院女子短期大学東日本大震災被災地支援ボランティアチーム。吉岡康子「Blue Birdの軌跡－青山学院女子短期大学東日本大震災被災地支援ボランティアの総括と展望－」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第27号 (2019) pp.3-31
- 15) 設置目的「郡山市では、高齢者の皆様の積極的な社会参加を促すとともに、今後の人口減少

社会において、高齢者が地域社会における重要な担い手として、生涯現役で活躍できるための契機とすることを目的に「あさかの学園大学」を開設しています。」あさかの学園大学の概要－郡山市公式ホームページ（2025年9月11日閲覧）

- 16) 菅野幸恵「青山学院女子短期大学同窓会東北支部卒業生聞き取り調査のまとめ－1952（昭和27）年から1964（昭和39）年卒まで」『ジェンダー研究センター年報』第3号（2023）